

医学と哲学の境界線

——プルタルコス『健康のしるべ』における医学思想——

瀬 口 昌 久

<序>

プルタルコスは『食卓歓談集』(612C-748D)をはじめとする『モラリア』(倫理論集)の随所において、健康に関わることや医学的知識について数多く言及している。なかでも『健康のしるべ』(Υγεινὰ παραγγέλματα: De tuenda sanitate praecepta)では、哲学者の立場から健康と医学について包括的に論じ、彼自身の医学思想をまとめている。小論は、『健康のしるべ』に焦点をあてて、プルタルコスの医学思想の特徴を明確化することを目的とし、そのことによって哲学と医学の関係を考察する基礎的作業にしたい。

<1> 哲学と医学の境界線

『健康のしるべ』は対話篇形式で書かれ、プルタルコスの友人のゼウクシッポスが哲学者の立場から医者 Moskion に対して、養生法について自説を詳しく話して聞かせる内容である。登場人物が短い対話をした後に、話し手の一人が実質的な中断なしに詳しく長い話をするこの形式は、プルタルコスの著作には多くはないが、プラトンの対話篇にはよくある文学形式である。対話篇の冒頭に、哲学に好意的な Moskion とは対照的に、もう一人の医者 グラウコス を登場させて、医者 の立場から哲学が医学に関わることへの強い批判を以下のように語らせている。

そのときも彼はわれわれめがけて真っ直ぐ向かって来たが、それもまだ遠くから次のように叫びながらなのだ。「健康のための養生法(生活法)について議論しようとは大胆至極、君たちには荷が勝ちすぎてふさわしくもない仕事だ、ものごとの境界線を混乱させるのがおちだ」とね。な

ぜなら、彼に言わせれば、哲学に関することと医学に関することとは「遠く隔たった別々のもの」であり、ちょうどそれは、「ミュシア人とプリュギア人の国境」のようなものだという。そして、本格的に力を入れてというわけではないが、さりとて無益でもないわれわれの話す言葉の端々を、彼は自分でも口の端にかけて、ずたずたに引き裂いてしまった¹⁾。(122C-D)

「ミュシア人とプリュギア人の国境」とは、本来、まったく異なる別のものであることを示す諺として用いられた。ミュシアは小アジア北西部、プリュギアはその東の小アジア内陸部に位置する。ミュシア人は取るに足らぬ民として当時の人々から蔑まれ、プラトンも「ミュシア人の端くれ」といった軽蔑的な表現を記す(『テアイテトス』209 B, 『ゴルギアス』521 B) 一方で、プリュギア調の調べが節度を表現しているとして高い評価を与えている(『国家』399 A)。それゆえ、ここでは単に医学と哲学の区別が語られているだけではなく、すぐれた医学に比べれば哲学は軽蔑されるミュシア人のようであると揶揄されていることになる。有能な医者であるグラウコス、医学者の立場から医術の専門家ではない哲学者が健康や養生法に対して議論することは意味がないばかりか有害であると批判しているのである。これは今日でも哲学が医学に関わり、生命倫理等の諸問題について発言することに対して、哲学者の発言を胡散臭いものとみなす医学者からの根強い批判がある事態と類似したものといえるだろう。医学に専門的な知識をもたない哲学者が、医学に関して発言すること自体が混乱を引き起こす越権行為とみなされるのである。

医学と哲学の間のこのような対立は、歴史的には前五世紀のヒポクラテスの時代からすでに表面化していた問題であった。ヒポクラテスの『古い医術について』では、エンペドクレスに代表される自然哲学者たちが、熱・冷・乾・湿といった原理を仮定することによって病気を思弁的に説明することが次のように批判されている。

医者や知者たちのなかには、人間が何であるかを知らない者には、医術が何であるかを理解できないと主張する者たちがいる。人間を正しく治療しようとする者は、まさにそのことを知らねばならないというのであ

る。その議論は哲学を志向しており、ちょうどエンペドクレスや他の人々が、自然について、まず第一に人間とは何か、最初どのように生まれどのように組成されたかを書いてきたごとくである。しかし、私は、自然について知者や医者によってそのような言われたり書かれたりしてきたことがら、絵画術にふさわしい程度にも医術にふさわしくないことだと見なしている。自然について何か明瞭なことを知るのには、医術以外の他のいかなるものによっても不可能であると私は見なしているからである。(中略) まさに医術こそが、人間とは何であるか、どんな原因によって生じるのか、またその他の明瞭なことがらを知るのであると私は主張する。なぜなら、どんな医者も必要なことをなそうとするならば、自然について、人間と飲食物の関係はいかなるものか、また習慣との関係はいかなるものか、それらの各々から各人にはどのようなことが生じるかを知り、また知るよう熱心に務めることが不可欠であると私には思えるからである。(『古い医術について』第二〇章)

古代ギリシア医学が、魔術や宗教的要素から解放された自然の原因に基づいて合理的医学体系を發展させ、西洋文化に強い影響を与えた歴史²⁾を考えれば、上記の主張が強い誇りと自信に満ちていることもうなずける。有能な医者グラウコスの批判も、このようなヒポクラテスの主張と医学の伝統を背景にしたものなのである。これと対応するように、哲学の方でも医学に関して何ら関心をもたず関わりをもたない立場の者もいることが『健康のしるべ』では次のように記されている。

それはね、君が生まれつきの哲学者だからだ、モスキオン。それに君は、医術に関心を寄せない哲学者には腹を立てるだろ。そして、もし哲学者が、幾何学や問答法や音楽について論じていると見られる方が、身体という

家屋敷で起こった善きこと悪きことのすべて³⁾

を探究して学ぶことを望むより、哲学者たる自分にはずっとふさわしいと思っている場合には、君は大いに憤るのだから。(122D)

哲学に対する医学の反撥に呼応して、哲学者のなかに医学に対して無関心や冷淡な態度を示す者がいたことは、哲学と医学の境界線が緊張と敵愾心をはらんだものであったことを思わせる。そのような状況において、プルタルコスPlutarchusの考えを代弁するゼウクシッポスZeuxipposは、医術は洗練性と卓越性と満足の点でいかなる技術にも劣ることがなく、その学びを愛する者には身の安全と健康を与えてくれるという利益があることをまず主張する。つまり、医者だけではなく、哲学者をふくむ市民もまた健康という利益のために医学的知識を学ぶことが勧められているのである。その上で、哲学の本性として医学との境界線を取り去るべきであるとして、次のように主張する。

したがって、健康について語る哲学者に対して、境界の侵犯であると論難すべきではない。いやむしろ、もし、かれらが言論において快いことと必然的なものを同時に追求しつつ、あらゆる境界を取り去って、いわば一つの学問領域として共通に諸学問を探究すべきである（ὡςπερ ἐν μιᾷ χώρᾳ κοινῶς ἐμφιλοκαλεῖν）と考えない場合にそのときこそ論難すべきである。（122E）

哲学者は、学問の境界を取り去って一つの学問領域として共通に諸学問を探究しなければならない。しかし、それは専門技術知のそれぞれが固有の領域を持つことを否定することではないし、哲学者が医者と同等の知識と技術をもって医学の共同研究なすべきことを意味するのでもないだろう。プルタルコスが先にあげたヒッポクラテスの厳しい批判に無知であったとはとうてい考えられないからである。一つの学問領域として共通に諸学問を探究することの内実とはどのようなものであろうか。それを理解するためには、プルタルコスが健康のための養生法（生活法）について実際にどのような勧告をなしているかを見なければならない。

< 2 > プルタルコスの養生法

『健康について』においてプルタルコスが勧めている養生法は、食事や飲酒や運動や休息および薬剤についての注意と勧めが中心であり、きわめて具体的実践的な勧告である。それら是对話篇の順序にしたがって、以下の14の

項目にまとめることができるだろう。

- 1) 手足が冷えないように運動で暖かくするべきである。(122F-124D)
- 2) 健康な時に病人のための食養生に慣れておくべきである。(122F-124D)
- 3) 身体其自然本性が必要とする食欲だけを満たし、評判に刺激されて魂が生み出す欲望を避けるべきである。(124D~126B)
- 4) 不摂生は多くの快楽を奪うので避けよ。(126B-127B)
- 5) 不摂生は外的要因によって病気を悪化させるので避けよ。(127B-C)
- 6) 病気の兆候に警戒して節制すべきである。(127C-130A)
- 7) 氣息の運動を大切にし、そのため朗読や音読をすべきである。(130A-131B)
- 8) 冷水浴よりも温水浴の方がのぞましい。(131B-D)
- 9) 軽い食物を採り、少食を守れ。(131D-132A)
- 10) 乳は飲み物ではなく食べ物であり、酒は水とともに飲むべきである。(132A-F)
- 11) 食中食後に文藝などの軽い話題で会話をすることが消化によい。(132F-136D)
- 12) 不自然な吐剤や下剤を避けよ。(134A-F)
- 13) 市民的生活を不可能にするような厳格すぎる養生法を避けよ。(134F-136D)
- 14) 自分の身体を観察し自分の体質をよく知って身体のお世話をせよ。(136D-137E)

以上の項目で述べられているプルタルコスの養生法は、今日の予防医学や健康医学の観点からも、かなりの妥当性もちうるものであり、おそらく多くの医者が賛成を表明すると思われるような実践的ですぐれた有益性をもっていると考えられる。

プルタルコスの養生法を特徴づける点として、まず第一に注目すべきは、プルタルコスが語る養生法の具体的な提案が、ヒポクラテス学派の医学から大きな影響を受けているとみられることである。プルタルコスが「ヒポクラテス著作集」といわれる医学文書にかなり精通していたことがうかがわ

れる。『モラリア』全体において、ヒポクラテス集成への明らかな言及は11回を数える。『モラリア』の該当箇所と対応する「ヒポクラテス著作集」の箇所が以下のように指摘されている⁴⁾。

82D (『流行病』第五卷二七), 90C (『流行病』第六卷三一一九), 127D (『箴言』第二章五), 291C (『呼吸について』一), 455E (『予後』二), 515A (『流行病』第六卷三一一九), 682E (『箴言』第一章三), 682E (『箴言』第一章三), 699C, 1047D, 1091C (『箴言』第一章三), 1099D (『箴言』第二章四六)

「ヒポクラテス著作集」のなかでも『箴言』への言及が多いのは、その著作がプルタルコスに時代を含め、ヒポクラテス著作集の中でもっとも膾炙していた著作であったからと考えられよう⁵⁾。ヒポクラテス派の医学の治療は、手術などの外科的治療や医薬の投与ではなく、食養生を基本とした養生法が中心であった。プルタルコスの健康についての勧めも同様に食養生を中心とした養生法であり、下剤や吐剤などの薬剤を避けることが述べられていて(134A-F)、医薬や薬剤の効用について肯定的なことはいっさい書かれていない。また、外科手術についてもプルタルコスの態度は否定的であるように思われる。『健康のしるべ』において、外科的手術については以下のように外科手術後に死に至った事例が一件報告されているだけである。

われらの二グロスは、ガラティアでソフィストとして講義をしていた折りに、たまたま魚の骨を呑み込んでしまった。しかし、別のソフィストが外国から現れて講義を始めたので、彼は自分の方が劣っているという評判を与えることを恐れ、骨が喉に刺さったまま講義を続けた。するとそこが赤く大きく腫れあがってなかなか治らず、その痛みに耐えかねて外側から深い切開手術を受けることになった。切り口から骨を取り除いたが、その切開傷が悪化して化膿し、ついに彼の命を奪うことになってしまった⁶⁾。(130F-131A)

プルタルコスの時代には、ヒポクラテスの流れを汲む「経験学派」の他にも、ストア派の自然学を背景にした「理論学派」や、古代原子論に基づく

「方法学派」などの医学諸学派がひしめき各学派が対立しあっていた。そのなかでも、プルタルコスの養生法の記述は、ヒポクラテス学派の医学の知見に最も大きな影響を受けていると考えられる。しかしながら、プルタルコスはヒポクラテス学派の医学的知見から健康についての常識的に妥当と思える見解を抽出しただけではない。『健康のしるべ』には、以上にあげた具体的な勧告に編み込まれた、養生法を裏うちするプルタルコスの医学思想を見出すことができる。次に、プルタルコスの養生法の思想的基盤について考察したい。

< 3 > 養生法を支える思想基盤

プルタルコスの養生法を支える思想基盤に関して、①身体の自然本性の尊重、②魂と身体の相互作用、③市民的徳のための健康、の三つの重要な論点を指摘できると私は考える。それぞれの論点について見てみよう。

① 身体の自然本性／ピュシス（φύσις）の尊重

身体の自然本性にかなった食事や生活習慣を守ることが、『健康のしるべ』の中心的な勧告である。『健康のしるべ』の全体はプルタルコスの次の言葉に集約できるだろう。

「最善の生を選べ。習慣がそれを甘美なものとなすだろう」とは立派に語られた言葉だ⁷⁾。それぞれ個々の領域においてそのことを実践する者に益があるが、わけても身体に関する生活習慣について、最も健康な間に習慣を導き、それが自然本性に好ましく親しく同族となるようにすれば有益である⁸⁾。(123C-D)

プルタルコスは飽食や贅沢な食事を避けるように繰り返し述べているが、美食そのものを頭から否定してはいない。「うまいものはそれが栄養の一部となる限り、われわれの自然本性にふさわしいものであり、空腹のときには、まだ必要な食物やうまい食物の楽しみを味わうべきである」とする。問題なのは、自然本性に応じた適切な量を十分食べて満足しておきながら、評判好

きと悪趣味によって、身体が必要としてはいない別の食欲を自分たちでかき立ててしまうことである。

もしも、自然本性が必要とするだけの快楽をわれわれが身体に受容するならば、大いに驚嘆するほどのすぐれた状態になる。(中略)しかし反対に、欲望が魂から生じて身体へと伝わり、魂の激情に仕え、その激情と共に興奮するよう強いる場合には、弱く儂い快楽の報いとして、きわめて狂暴で深刻な被害を残さざるをえないだろう。魂からの欲望によって身体が快楽を求めて興奮するのを最少にすべきである。なぜなら、そのような欲望の始原(アルケー)は、自然に反しているからである。ちょうど腋の下をくすぐられると、穏やかでも機嫌がよいのでもない不自然な笑いが魂に生じるが、しかし、それが痙攣にも似た苦しいものであると同様に、身体が魂によって刺激を与えられて引き起こされる快楽は、錯乱と混乱を引き起こすものであり、自然本性とはかけ離れたものなのである。(125B-C)

限度を超え、打ち負かすことのできない欲望を健康な身体が自然に生み出すことはないとも言われている(九節)。また、身体的な快楽も、身体が自然本性に調和した状態でないとその本来の快楽を人に与えることがない(一二節)。自然本性にかなっているかどうかは飲食だけにとどまらず、運動や入浴や休息においても問題とされ、それぞれの場合に自然本性が必要としているものを得ていれば必要十分とされる(一六節、一七節、一九節)。自然(本性)にかなっているかどうかということが、プルタルコス(Plutarch)の養生法にとって根本的で決定的な要因なのである。

しかし、プルタルコスの自然／ピュシスの概念はさらに問われなければならないだろう。先に見たようにヒポクラテス学派は、エンペドクレスの四元素説による病気の理論を思弁的であると批判し、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の四体液の不均衡によって病因を説明した(ヒポクラテス『人間の本性について』四章)。それらの体液のいずれかが、過多となったり欠乏したりすることが病気の原因となるのである。これに対して、『健康のしるべ』で、病気や健康の自然学的説明としてプルタルコスが述べているのは、主として以下のような記述である。

1. 外から来る原因や病原に、いわば実質と実体とを与えるのは、その基となる過剰な食物である。大量の消化不良物のなかでは、いわばかき立てられた沈殿物のようなものが、すべてを汚くし不愉快で取り除きたい物に変えてしまう。(127C)
2. 食べ過ぎのために、身体内部で神経の周辺の氣息が緊張したり閉塞したりする。(127E)
3. 体液の過剰や濃厚化、また身体内部の氣息の障害に留意すること。(129B)
4. 悪い氣と苦い呼氣が結合し、プラトンがいう「魂の循環運動」と混ぜ合わされる場合には、精神の落ち込み意氣消沈する。そのような場合には、それが身体的原因に起因するのであり、絶食等が必要となる。(129C)
5. 声は氣息の運動であり、内臓の周辺のいわば源泉において力を与えられると、それは熱を増して血液の流れをよくし、あらゆる静脈をきれいにし、すべての動脈を開き、食べ物を受け取り消化する器官に堆積物が生じる原因となる排出された体液の結合と固着をゆるさない。身体深部の氣息の乱れと緊張を鎮めてやれば、痛みなく未消化物を処理できる。(130D-E)

プラタルコスの記述は組織だっていないが、以上のことから推測できるのは、食べ過ぎによる余剰の未消化物が、体液の過剰や濃厚化および氣息の緊張と圧迫を生み出し、そのことがさらに身体の代謝を阻害して悪循環を重ね、身体に病気や障害を引き起こすという理論である。それはプラトンが『ティマイオス』であげている病気の第三の説明理論を思い起こさせる。プラトンは『ティマイオス』(81E-86A)で身体の病気を三種類に分類し、それぞれの病気の原因と機構を詳しくかつ大胆に説明している。第一の病気は、エンペドクレス的な四元素(土・水・火・空気)の不均衡によって生じるものとし、第二の病気はそれら四元素から形成される髓・骨・肉・腱・血液の生成の順序が逆行する場合に引き起こされるとする。そして、第三の病気の種類として、「息」による場合と、「粘液」および「胆汁」によって引き起こされる場合をあげている。氣息と体液の混乱が病気の原因とされるのである。第一の病気の説明は、ヒポクラテス学派やガレノスから批判された内容であ

るが、第三の病気の説明はヒポクラテス学派の体液説にも近く、プラトンの医学理論がどのような影響を受けているかには大いに論争がある¹⁰⁾。このような『ティマイオス』の詳細な記述に比べて、プルタルコスPlutarchusの病気の自然学的説明は、ヒポクラテス学派との論争になるプラトンの第一と第二の理論には言及することがなく、第三の理論も遙かに簡略化している。プルタルコスは、プラトンとは異なり、病気の自然学的原因論には深入りをせず、ヒポクラテス学派との医学論争に巻き込まれることをむしろ避ける道を意図的に選択しているように私には思われる。プルタルコスにとって、医学との学問の境界を取り去って一つの学問領域として共通に諸学問を探究することとは、医術の共同研究や論争に立ち入ることを意味してはいなかったように考えられるのである。プルタルコスの医学思想は、身体bodyの自然学的説明よりも、身体に影響を与える魂soulのあり方に大きな比重があるとも言えよう。それが次の論点にも関わってくる。

② 魂と身体bodyの相互作用

先にあげたように、魂soulの欲望に刺激されて引き起こされる身体bodyの快楽は有害であり、錯乱deliriumと混乱confusionを引き起こすことが述べられていた。身体bodyに病気や大きな悪をもたらすのは魂soulの卑しい働きである。

しかし、魂soulのなかの放埒licentiousnessで卑しい部分は¹¹⁾、労苦の直後に水夫のように放縱によって快楽や歓楽pleasureに引き込まれ、快楽の直後に再び仕事と金儲けに押しかける。そして、自然本性が何にもまして必要としている平静さと落ち着きを自然本性が得ることを許さないで、こうした不規則によって自然本性を変質させ、かき乱してしまうのである。しかし、知性のある人々なら、身体bodyが労苦しているときには快楽をけって与えない。
(136C)

魂soulが身体bodyに害をもたらすのは、快楽に関することだけではなく、仕事などの身体bodyの酷使abuseに関してもあてはまる。

私が思うに、わけてもそのような人々に対して、デモクリトスDemocritusは、もし

身体が魂による虐待を告発すれば魂は罪を免れえないだろうと述べたのである¹²⁾。実にまた、テオプラストスが述べていることにはおそらく真実があらう。彼は比喩を用いて、魂は身体に高額の家賃を支払うべきであると語っているのである¹³⁾。とにもかくにも、魂が身体を道理にかなった仕方では用いることなく、身体がふさわしい仕方では世話を得られない限り、身体は魂の悪をより多く味わうことになる。(135E)

魂が身体に与えるこのような悪は、逆に魂にも悪影響を及ぼす。あまりにも几帳面すぎる養生法もまた、身体を些細なことにもびくつかせ、ぐらつきやすくし、魂自体の喜びをも小さく抑えこんでしまうと考えられている(128E)。また、精神の不調は身体の状態と結びついている場合が多いことが、病気の予兆として次のように語られている。

さらに、魂の情動も身体が病気になる危険を知らせている。たとえばしばしば、明らかな原因がなく¹⁴⁾、不合理にも意気が消沈したり恐怖感を覚えたり、希望を突然に失ってしまうことがあるだろう。また、気性が怒りっぽく刺々しく些細なことに苛立つようになったりする。(129B-C)

魂が身体に悪を与えることによって引き起こされた身体の不調が、今度は魂のあり方を損なう。それゆえに魂は身体をすぐれた状態を保つべく、道理にかなった身体の手世が求められている。心身の協働と調和を求めるプルタルコス『健康のしるべ』を次のような言葉で結んでいる。

つまり、身体が労苦して休息を必要としているのに、緊張を弛め骨休めすることを少しも望まないでいると、遠からず発熱や眩暈に襲われて、書物や言論や研究をあきらめることになり、身体と共に病気を患って苦しみを共にすることを強いられるだろう。プラトンが¹⁵⁾、魂をとまなわないうで身体を、身体をとまなわないうで魂を動かしてはならず、いわばその一対の間の均衡を注意深く守らねばならないと警告したのは正しい。わけても身体が魂と共に働き、共に労苦している場合には、身体に最大の配慮と注意を払い、美しく愛すべき健康が与えるさまざまな善いもの

のなかで、健康が与える最も美しいものとは、自分たちの言論と行為において徳を持ち、その徳を用いるのを妨げるものがないことであると考えるのである。(137D-E)

先に見たようにプラトンに比べれば、プルタルコスが自然学的病理の解明よりも、健康のための提言の経験的有効性を優先している。しかし、ここでもプルタルコスが重要な論拠として引用するのはプラトンの『ティマイオス』の記述(88B)なのである。プラトンは『ティマイオス』で身体の病気の分類と説明に続けて(81E-86A)、魂の病気について説明し、それが身体的な条件を通して生じることを論じている(86B-87B)。その後、今度は身体と魂の健康について論じ、心身の健全性を保つために心身の均衡と調和のとれた運動の必要性を述べている(87C-89D)。プルタルコスが『健康のしるべ』の結びの言葉に、『ティマイオス』の心身の病気と健康を論じた結論部分を引用していることは、プルタルコスが『ティマイオス』の心身の病気と健康についての記述(81E-89D)を下敷きとして著述していたことを明確に示している。だが、この結びの言葉には、そのような『ティマイオス』との密接な連関だけではなく、次に述べるように健康とは徳のために必要であるとプルタルコスが明確に考えていたことをも示されている。

③ 市民的徳のための健康

健康は医学の目的であり、医学は健康の目的を問うことはない。しかし、哲学は健康の目的をも問う。では健康の目的とは何か。健康の目的とは、言論と行為において徳を持ち、その徳を用いるのを妨げるものがないことであるとプルタルコスは考える。そのことはプルタルコスが厳格すぎる養生法／生活法を批判する箇所でも述べられている。厳格すぎる養生法を守る人々は、不必要な断食を定期的に繰り返し、ある季節や数や周期に導かれた訓練をする生活形式のとりこになったり、縛られたりする。そのために彼らは市民的生活から隔絶した生活を余儀なくされる。しかし、彼らはプルタルコスによれば養生法の目的をまったく見失っているのである。厳格すぎる養生法への批判と、健康を守る目的が市民的な活動にあることが次のように述べられている。

なぜなら、そうしたことは安全ではなく、容易でもなく、市民的でもなく、人間的でもないからであり、牡蠣か木の切り株の生活状態に類したものであるから。その融通のなさや食事、節制、運動、休息における制限によって、隠遁して無駄に日々を過ごすことになり、孤独で友人もなく、不名誉でおよそ国家社会の一員からはほど遠い生活へと自己制限を課することになる。「それは私の見識にとうていかなうものではない」と彼は述べていた¹⁶。健康というものは、怠惰や無為によって購われるものではない。怠惰や無為は、病気にともなう害悪のなかでも最悪のものである。無用さと安穩によって健康を維持しようとする者は、見ないことによって眼を、話さないことによって声を守ろうとする者と何ら違いがない。というのは、健康であるならば、多くの人間愛的行為に身を捧げるのにまさることはないからである。いやしくも怠惰が健康の目的を破壊するならば、怠惰が健康であるなどとけっして考えてはならない。安穩に暮らしている人たちの方がより健康であるということは真実ではない。(135B-C)

『健康のしるべ』のこの箇所までの記述では、政治に関わることがらは健康や養生法の説明のために引き合いに出されているだけであったが、ここでその立場が逆転する¹⁷。健康そのものが目的ではなく、健康の目的は人間愛的行為であり、市民的活動のためにこそ健康や養生法は守られるべきなのである。実は、このような市民的徳のために健康があるという見方もまた、プラトンの医術に対する見解を色濃く反映したものとといえるのである。プラトンは『国家』において、国に放埒と病気がはびこるときは、数多くの裁判所と医療所が開かれて法廷技術と医療技術が幅を利かせることになるとし、他方、善き法秩序のもとにある国家においては、一生病気の治療をしながら過ごす暇は誰にもなく、ぜひともなさねばならない仕事がひとりひとりに課せられていることを国民がみな知っているとして述べている。病気になり医者にかかっても治療のめどがたなくなつた職人は、次のように考えると述べられている。

「けれども、もし長期の療養を命じられて、頭に布切れを巻いたり、それに類したことをいろいろされるようなことがあれば、彼はただちに言

うのだ、——自分には、病気などしている暇はないし、それに、病気のことに注意を向けて、課せられた仕事をなおざりにしながら生きていても何の甲斐もないのだ、と。そしてその後は、そのような医者には別れを告げて、いつもの生活へと立ちかえり、健康を回復して、自分の仕事を果たしながら生きて行く。またもし彼の身体がそれに堪えるだけの力がなければ、死んで面倒から解放されるのだ」

「たしかにそのような人にとっては」と彼は言った、「それが医術というものに対してとるべき正しい態度だと思います」（『国家』407D-E）

ここには国家にとって無益な人間を排除するという思想ではなく、病人自身が、ただ延命だけを目的として生きるのではなく、自分の病気と生きる目的を考えて生活の質と治療方法を判断するという考え方がみられる。プラトンはアスクレピオス派の医術はそのような認識をもって治療していたけれども、体育術の教師であったヘロディコスが種々の厳しい養生法や鍛錬法を考案して、人々を延命の努力に駆りたてて多くの人々を疲れ果たせることになったと批判している（『国家』406A-B）。プルタルコスもまた同様に、厳しい養生法は否定し、養生法とは市民としての徳を持ち、徳を行使するためにこそ必要であるとみなしているのである。

<結び> 越境する哲学

以上、プルタルコスの養生法の内実と、その養生法を支える思想基盤を三つの論点に注目してみた。プルタルコスはヒポクラテス学派から影響を受けており、また病理の自然学的解明よりも養生法の経験的有効性を重視した立場を選んでいるけれども、彼の養生法の本性はプラトンの医学思想に最も大きく依拠している。プルタルコスは、魂が節制を欠くことにより、身体其自然本性に反した魂の欲望から生ずる食欲や飲酒などが、身体の病気の最も大きな原因となると考える。つまり、食生活や運動や休息などに関する生活習慣の過ちが病気を生み出すのである。そのようないわば生活習慣病を防ぐためには、生活方法とそれを支配する魂のあり方を変えねばならない。身体の病気の治療といえども、身体を支配する魂の配慮や世話にどうしても及ばざるをえないのである。魂のそのような世話と配慮は、健康の目的であ

る人間の社会的行動や生き方の問題と深い関連をもつ。すなわち、健康とは人間のすぐれた生き方として、徳（卓越性）の問題にまで通じているのである。

たしかに医術や医者が病気の治療をする。しかし、病気の大きな原因となる生活のあり方をいかにすべきか、また生活の目的や生き方のなかで何が優先されるべきかという問題は、ひとり医学が答えるものではない。哲学とは学問の境界を取り去り共通に諸学問を探究しなければならないとしたプルタルコス判断は、人間の健康を求める医学が、いかなる生き方を善きこととして選択するのかという問題を、たとえ潜在的にせよ、つねにはらんでいることに根拠をもっている。本来的には身体の治療とは、魂の治療/世話を抜きにしてはけっしてありえないのである。医学が人間の身体と生命を対象としている限り、社会的存在としての人間の生き方そのものに関わらざるをえないからである。かくして、医学が人間を問題にせざる得なくなるとき、あらゆる境界を取り去る哲学の越境が要請される。

1) 翻訳の底本としては、ロウプ古典叢書 (*Plutarch's Moralia*, vol.II, by F.C. Babbitt, 1928) を基礎として、ビュデ版 (*Plutarch; Oeuvres Morales*, tome I seconde partie, par R.Klaerr / A.Philippon / J.Sirinelli, 1989, tome II, par J.Defradas / J.Hani / R.Klaerr, 1985) とトイブナー版 (*Plutarchus: Moralia I*, 2 ed. H.Gartner, 1993) を合わせて対照した。全訳は『モラリア2』の一編に含まれ、京都大学学術出版会の西洋古典叢書として近刊の予定である。

なお、ヒポクラテスの引用は私訳であるが、プラトンからの引用は、岩波版プラトン全集によった。

2) Cf. Longrigg, J., *Greek Medicine From the Heroic to the Hellenistic Age*, 1998, pp.1-2.

3) ホメロス『オデュッセイア』第四歌三九二。

4) Cf. Jouanna, J., *Hippocrates*, translated by DeBevoise M.B., 1999, p.476, n.16.

5) Cf. *Ibid.*, p.352.

6) ただし、Renehan は、ニグロスに施された外科手術の記述を取り上げ、喉に刺さった魚の骨を外から切開して取り除く手術が他には報告がないけれども現実に行われた興味深い事例であることを、後1世紀の博物学者ケルススの『医学について』における刺さった矢の除去手術の対比から論じている。外科手術そのもの

- は成功し、ニグロスの死因は細菌感染による腐敗症だとする。Cf. Renehan, R., "A rare surgical procedure in Plutarch", CQ 50(2000), 223-229.
- 7) プルタルコスはこのピュタゴラスの勸告の言葉としている。プルタルコス『心の平静について』466F, 『追放について』602B参照。
 - 8) プラトンもこれと同様の考えとして、『法律』797Eにおいて、食生活の良い習慣が健康で快適な生活をもたらすことを述べている。
 - 9) プラトン『ティマイオス』47D参照。
 - 10) 岩波版プラトン全集12『ティマイオス』補注L(種山恭子訳註)を参照。
 - 11) プラトンの魂三区分説の「欲望的部分(τὸ ἐπιθυμητικόν)」に対応するものであろう。
 - 12) デモクリトス「断片」B159(DK68B159)参照。
 - 13) テオプラストス『魂について』『断片』一, 二を参照。
 - 14) ここのテキストはビュデ版, ロウプ版に従い(φανερῶ)と読む。
 - 15) プラトン『ティマイオス』88B。
 - 16) ホメロス『イリアス』第九歌一〇八のバラフレーズ。ここでいう「彼」はホメロスではなく、この話をした友人、おそらくはプルタルコス自身のことであろう。
 - 17) Cf. Senzasono, L., "Health and Politics in Plutarch's *De Tuenda Sanitate Praecepta*", in *Plutarch and His Intellectual World* edited by Mossman J. 1997.